

# 万行寺報

Mangyoji Jihō

発行 浄土真宗本願寺派 万行寺  
住職 山崎信充  
〒385-0003  
長野県佐久市下平尾4 6 1 - 1  
電話 0267-67-2460

2025(令和7)年

仏暦2568年

10月号

(第169号)

実践運動 総合テーマ『そとつながる ホツがつたわる～結ぶ絆から、広がるご縁へ～』



## 住職 法話

### 「必ず」救われる身に定まる



正信念仏偈に学ぶ  
帰入功徳大宝海  
必獲入大会衆数  
功徳大宝海に帰入すれば、  
かならず大会衆の数に入る  
ことを獲。

「現代語訳」  
本願の名号に帰し、大いなる功徳の海に入れば、浄土に往生する身と定まる。

親鸞さまは『一念多念証文』に、天親菩薩の『浄土論』の「功徳大宝海」を引かれています。

「功徳」というのは、名号のことである。「大宝海」とは、あらゆる功徳が欠けることなく満ちていることを、海にたとえておられるのである。そしてこの功徳を、本願のはたらきを信じる人の心のうちに、速やかにはやく、欠けることなく満ちわたらせることを知らせようというのである。そ

のようなわけで金剛の信心を得た人は、知らなくても、求めなくても、すぐれた功徳の宝がその身に満ちみちるので、そのことを大宝海とたとえておられるのである。

そして、『浄土論』の「得入大会衆数」を引かれています。五種の功徳を成就する門の第二の「大会衆門」になります。

第二の門に入るとは、その名のいわれの通りに阿彌陀仏を讚嘆し、その光明という智慧の相の通りに名を称えることにより、相應を修めようとするから、阿彌陀仏の説法の座の聴衆に連なることができるのである。これを第二の大会衆門に入るといいます。

このように、お題の二句は天親菩薩の『浄土論』を引用されているところですが、

そこで、『浄土論』では「得」の字ですが、親鸞さまはここで「獲」の字を使われています。どちらの字も手に入れるという意味なのですが、「得」

には、この世を離れ悟りを開き仏になることで得られる利益、そして「獲」には、この世で仏道に入るための信心を獲られる利益と使い分けられています。

親鸞さまは、そこに「必ず」の字を加えられ、すぐれた功徳の宝を欠けることなく満ちわたらせくださるのだから、必ずこの世で信心を獲て救われる身に定まるといわれるのです。

仏には揺るぐことのない必ずありますが、必ずと言ってあらゆる場面で相手と約束事をする必要があります。

しかし、都合で変更もしくは取り止めとなつたという経験があるとあります。このように、人間の必ずには自分の都合で変わつてしまふ辛い思いをしてしまつたり、相手の都合だった時は少し悲しい思いをすることがあります。どちらでも苦しい思いをしてしまふものです。「必ずね!」と念をおす約束事ではなく、「とありあえず」と思いあえる関係が大事なのでしょう。

# 仏教語豆事典

## 挨拶[あいさつ]

悟りの深淺を試していた

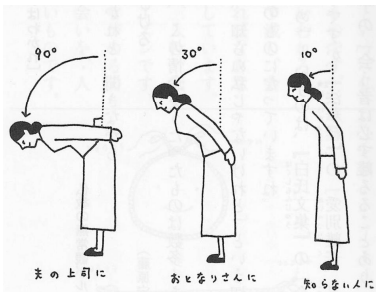
「一言、ご挨拶を申し述べます」—儀式などのときに、よく聞かれる言葉です。挨拶状などという手紙が来たりもします。ちょっとすごんで「挨拶してやるぞ」とか、冷たく「ご挨拶ですね」とか、挨拶は今では日常語になりました。

しかし、挨拶はもともと仏教語なのです。挨拶は「押す」こと。拶は「せまる」という意味から、挨拶は、前にあるものを押しのけて進み出ることをいいます。

禅家では、「一挨拶」といって、師匠が門下の僧に、または修行僧同士があるいは軽く、あるいは強く、言葉や動作で、その悟りの深淺を試すことがあります。これが挨拶なのです。

そこから転じて、やさしく応答とか返礼、儀礼や親愛の言葉として使われるようになりました。

最近では、日常の挨拶が少なくなりました。日々の暮らしを円滑に過ごすためには、まず挨拶からですね。



## 愛敬・愛相[あいきょう・あいそう]

仏さまのお顔を拜めば

「男は度胸、女は愛嬌」とか、「愛嬌をふりまく」など、愛嬌といえば、にこやかでかわいらしいことや、愛想のよいことを意味する言葉として知られています。

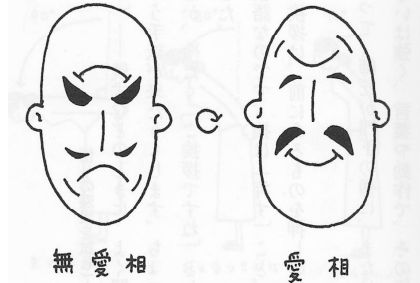
この愛嬌は本来、愛敬と書き「アイギョウ」と読んで仏教語でした。愛しみ敬うことを意味したのです。

仏・菩薩の容貌は温和で慈悲深く、拜む人たちが愛敬せずにはおられない相を表しておられるので、その相を「愛敬相」といいます。

また、「愛想がよい」とか、「愛想が尽きた」などと使われている愛想という語も、本来は愛相で、そのもとは同じ愛敬相から出た語のようです。

同じ愛敬相から、「愛敬・愛相」が生まれ、それが「愛嬌・愛想」とな

っていったようですが、いづれも、もとは仏さまのお顔の相だったのです。



「くらしの仏教語豆事典」文・辻本敬順 絵・寄藤文平／本願寺出版社刊より

### 編集後記

年の瀬も近づき、今年「二季」という言葉が生まれた年になりました。季節の様子の変化が身体で感じられるようになってきました。どうなっているのでしょうか。◆暦では連休になることが多くなつたためか、何かと慌ただしく法務や家事をさせていただいています。今月も発行が遅くなり申し訳ありません。

### 年忌法要表

1周忌	2024(令和 6)年	23回忌	2003(平成15)年
3回忌	2023(令和 5)年	25回忌	2001(平成13)年
7回忌	2019(令和 1)年	27回忌	1999(平成11)年
13回忌	2013(平成25)年	33回忌	1993(平成 5)年
17回忌	2009(平成21)年	50回忌	1976(昭和51)年